

コンピューター
サイエンス

企業

一番面白いと思うことで、食べていける人になるために。

吉田明子 (シャープ株式会社 研究開発本部 AV技術研究所)

仕事の内容とやりがい

他人は、何をどのように見ているか。普段の生活の中で、我々はこれを知ることはできません。しかし、客観的な外的刺激とそれに対する反応の関係を観察することで、人間の感覚を部分的に、しかし客観的に測定することは可能です。このように「人間の内的な感覚のモデル化」をしようとする学問を、psychophysics (精神物理学または心理物理学)と呼びます。私は、この中の「視覚」に関する研究を続けてきました。専門分野であるコンピュータグラフィックスとの繋がりは、任意の表示パターンとそれに対する「見え方」のモデルが確立して画像処理に応用し、画の「見せ方」を工夫することができるという点にあります。

どんな研究分野でも同じですが、普段は地味な作業と試行錯誤の繰り返しです。そんな中、研究者の醍醐味は、「今この瞬間、このことは、世界中で自分しか知らない」という日があることです。この嬉しさにとりつかれてしまったのが最後、研究者であることはやめられなと感じています。

また、企業に就職してからは、次世代ディスプレイシステムの研究開発にも関わることができました。アカデミアでは絶対に体験し得ない仕事の機会が、企業には数多く存在しています。チャンスの数の多さと幅の広さ、関わる人の数が多いため、時には非常にダイナミックに仕事が進む点などは、企業でしか味わえない面白さだと思います。

進路決定のきっかけ

高校の文理選択時に、迷うことはありませんでした。子供の頃から、理系に進むのは当然と考えていたように思います。その後、大学や大学院への進学、就職など、人生の節目々々における選択では、目の前にある選択肢から常に「一番面白そうなもの」を選んできました。最初から研究者になりたいと思っていたわけではないのですが、そのような選択を繰り返してきた結果、現在に至っています。

仕事と生活のバランス

結婚して3年になりますが、仕事の関係上、平日は夫が東京、私が関西におり、週末にどちらかが移動するという週末婚の形態をとっています。この生活形態のため、自然と平日(仕事)と休日(家庭)をきっちり分けられるようになります。平日は大抵朝5時に起きて読書などしていますが、休日は10時過ぎまで寝ていた上にその後も一日中何もしないなど、やや極端なほどオンとオフの切り替えをしています。他にも、月に3回お茶の稽古の時間があり、仕事とも家庭での生活ともまったく違う種類の時間を過ごすことは、私にとってとても大事なものとなっています。

進路選択に対してのメッセージ

まずは、ご自分が面白そうだと思うことを優先してください。その上で、現実的な解として目の前にある選択肢からひとつ選ぶことができれば、最も理想的だと思います。進路の選択に迫られることは、進学のみにとどまらず、何度もあります。私自身は、選択肢はできるだけ多い方が良いと思っています。当然のことですが、何もせずにその選択肢が増えることはありません。自分が面白そうだと思う直感や理想を大切にしつつ、将来の選択肢の増やし方を冷静に考え、それを増やすための努力を怠らなければ、何らかの結果はついてくると思います。そういった理想と現実のバランスを、上手にとれる人になれるといいですね。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

日本で修士号を取得した後、アメリカの大学院に進学しました。その後ドイツの研究所に移って修士号と博士号を取得するまで、合計8年間を海外で過ごしました。どちらも世界中から学生や研究者が集まっており、それぞれのバックグラウンドと個性の多様さは、日本国内ではまず体験できないことと思います。常に言葉の不自由さや生活習慣の違いなど他のストレスにもさらされるため苦労はもちろん多いのですが、広い世界に出て得られるものは、その苦労を遥かに凌駕すると思います。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

アメリカもヨーロッパも、少なくとも大学院には自分でお金を稼ぎながら学べる体制がしっかりと整っています。学生の自活を可能にする環境は、若いうちに限らず人生のどのタイミングでも大学に戻れるということの意味します。これは特にアメリカの大学院で顕著であり、学生の年齢層はとても広いものになっていました。子供のいる学生やクラスメイトの出産などはまったく珍しいものではなく、総合大学であればキャンパス内に保育園も病院も整備されており、教職員はもちろんのこと学生も安価で利用できます。そういった外的環境と、おそらくは文化的背景の多分な影響もあり、忙ししながらもそれぞれの分野でアクティブに活躍している人がとても多かったのが印象的でした。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

アメリカの大学院へ進学することを決めた最も強い動機は、「自分の将来の選択肢を増やしたかったから」です。私が学部生だった頃もいわゆる就職氷河期と言われており、特に女子の就職はとても厳しいものがありました。世界は広いのだから、日本国内に仕事がない程度のことでも困らずに済むような教育を受けたいと思ったのが直接の動機です。アメリカでは、学費免除に加えて週に20時間RAとして働いて月給をもらえる種類の奨学金を受けていました。ドイツに移ったのは、学部生時代に授業をとった先生から、こちらへ来ないかと声をかけてもらったことがきっかけです。ドイツの大学の学費は無料であり、修士課程の間はTAやRAで大学から奨学金を貰い、修士号取得後はマックスプランク研究所のPhDフェローシップで研究を続けることができました。

滞在先の思い出・生活者としての体験

私が学部生として通った大学は日本国内の公立大学ですが、外国人教員が半分以上を占めており、二回生の後期頃から専門課程の授業はほぼ全て英語で行われるなど英語中心の環境でした。そのためアメリカの大学院に進学する時の心理的障壁はそれほど高くなく、慣れているから大丈夫だと少々高をくくっていたように思います。実際は、渡米後の最初の授業で「宿題が出た」ということすらわからないほど先生の仰っていることがわからず、かなり苦労しました。最も苦戦したのがクラスの4割を占めていたインド留学生の英語です。彼らと会話が成立するようになるまで結局半年かかったことを、よく覚えています。



<吉田明子(よしだあきこ)プロフィール>

佐賀県立唐津東高等学校卒業→福島県立会津大学にて修士号取得→アメリカ合衆国 オレゴン州立大学大学院→ドイツ連邦共和国 マックスプランク研究所/ザールラント大学にて修士号(M.Sc.)取得→同 工学博士号(Dr.-Ing.)取得。コンピュータサイエンス専攻。2008年、シャープ株式会社入社。以来、同社研究開発本部にて次世代ディスプレイシステムの研究開発、「人がものをどう見ているか」をモデル化する研究に従事。



ドイツ滞在時(研究室のメンバーで遠足に)